の関係、はだか複数名詞句の作用域と意味、否定文の焦点や否定極性表現として特に some と any に注目している。any の意味や some との使い分けなど、もう一度確認してよい有益な情報が数多く提供されている。

第 15 章「語彙・語法」では、日本語の形容詞述語文(「象は鼻が長い」タイプの文)の英訳、アル・ナイを使った日本語文(「彼女は愛嬌がある」タイプの文)の英訳、「have +形容詞+名詞」を用いて英訳できる日本語文、日本語では動詞を用いるが英語では形容詞を用いて英訳される場合が考察されている。最後に、「be 動詞+形容詞+前置詞句」の形がイディオムとして取り上げられている。これは SVCA という 8 番目の文型として捉えられることもあるほど英語では数多い述語の形である。

本書は「英語教師力アップシリーズ」の第 2 巻である。英語学専攻歴の有無にかかわらず独力で学べる英文法の情報が満載である。英語教師力をアップし「授業力アップ」につながる書であることは間違いない。

参照文献

廣瀬幸生 (1995)「関係詞節」『英文法への誘い』斎藤武生・原口庄輔・鈴木英一 (編), 231-246, 開拓社 , 東京 .

ホフマン , ロナルド・影山太郎 (1986)『10 日間意味旅行』くろしお出版, 東京.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language,* Cambridge University Press, Cambridge.

今井邦彦・中島平三・外池滋生・福地肇・足立公也 (1989)『一歩すすんだ英文法』大修館, 東京 .

柏野健次 (2012)『英語語法詳解——英語語法学の確立に向けて』三省堂, 東京.

Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*, The Free Press, N.Y.

佐久間鼎 (1951)『現代日本語の表現と語法』厚生閣, 東京.

Sweetser, Eve (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, N.Y.

安井稔 (2004)「動名詞が危ない」『英語青年』 150-9, 34-37.

西南学院大学 ——藤 本 滋 之

畠山雄二編 『理論言語学史』

開拓社 2017 年 xv + 303 pp.

1. はじめに

本書『理論言語学史』は、畠山雄二氏によって編集された、理論言語学の歴史を振り返るものであり、その目的は「今ある理論言語学がどのように形作られ、そして今後理論言語学がどのような方向で進むのか」(p.vi) を考えるきっかけを作るためである。本書は 5 部構成になっているが、まず 2 節において本書各部を概観する。3 節では、パラメータ理論の展開と言語進化について及び「言語」とは何かについて考察する。4 節はまとめである。

2. 本書の構成

「第 I 部 : 初期理論から障壁理論まで」(本田謙介氏・田中江扶氏・畠山雄二氏著) は、生成文法の初期理論から GB 理論までの理論的変遷を、句構造、境界理論、言語モデルでの文法と意味の関係、移動変形規則、サイクル、日英比較統語論などに焦点を当て概観している。特に強調されていることは、理論が変遷するごとに「分岐点」が存在したが、それらの「分岐点」は当時だけではなく現在においても重要であり、議論の余地が残されているという点である。そのような「分岐点」としては、(すべての句構造は内心構造であると主張する) X バー理論から外れた外心構造を認めるかどうか、「二項枝分かれの仮説」に反する三項以上の枝分かれが許されるかどうか、wh 移動に代表される所謂「A バー移動」はすべて連続循環的に適用されるべきかどうか、wh 移動・NP 移動・主要部移動を α 移動に統一化すべきかどうかなどがあり、これらの問題は現在でも重要な研究課題になり得ると指摘している。

「第 II 部 : 経済性理論から極小主義まで」(藤田耕司氏著) では、原理・パラメータのアプローチから極小主義への変遷の背景と極小主義内での現在までの理論的展開について解説している。原理・パラメータのアプローチでは、普遍文法を構成する原理とパラメータに制限がなく極めて言語領域固有で複雑である点が問題であったことを、境界理論、句構造理論及び主要部パラメータなどの具体例を用いて説明している。そして、原理・パラメータのアプローチから極小理論への過渡期では、言語の統語演算システムは経済的システムであるという見通しのもと、言語領域固有ではなく自然物一般が持つ普遍的な特性を有する「経済性の原理」が大きな役割を果たしたことが、「優位性効果」及び「併合が移動に優先する」などを例として用い説明している。さらに、極小主義内での理論的展開として、「α 併合」へ統一化、最小検索によってラベルを決定するラベル理論、統語演算システムの効率性に貢献するフェイズ理論、統語演算システムは意図・概念システムに対してのみ最適化されているというインターフェイス

の非対称性について解説している。

「第Ⅲ部：認知言語学」（酒井智宏氏著）では、まずソシュールから生成文法までの言語学史について、心理主義的立場の是非に関する議論を中心に概観している。ソシュールの言語学における「ラング」は社会習慣としての知識を内在化したものであり、その意味で心理主義的立場をとっていたが、アメリカ構造主義言語学では、言語学は直接観察可能なものだけを対象とする記述と分類の学であるべきとし心理主義を排除したと説明している。そして、チョムスキーによって提唱された心理主義に基づく生成文法の確立、さらには生成文法の中での生成意味論と解釈意味論の間の言語学戦争について触れている。次に、認知言語学がどのような経緯で成立したかについて解説している。認知意味論は、アップデートされた生成意味論であったが、そこでは「プロトタイプカテゴリー」、「非還元主義」、「非離散的（連続的）カテゴリー」、「ネットワークモデル」、「経験基盤主義」という認知言語学全体を貫くキーワードとなっていく知見が得られた。そして、ラネカーによって提唱された認知文法では、上記の認知意味論の考え方をすべて受け入れた上に、「用法基盤モデル」、「語彙と文法の連続性」、「文法の有意味性」、「捉え方の重視」が重要な特徴であると指摘している。

「第Ⅳ部：形式意味論」（藏藤健雄氏著）では、自然言語を形式化すること（代数として体系化すること）を目指した企てである形式意味論を概観し、その特徴として構成性の原理を遵守すること及びモデル理論に基づく真理条件的意味論を採用していることを指摘している。そして、可能世界意味論、特に可能世界を単独のタイプとする二分類タイプ理論における束縛理論、タイプ変換、数量詞の作用域分析（割り込み量子化・数量詞保管アプローチ・統語構造を直接解釈するアプローチ・LFでの数量詞移動を仮定するアプローチなど）、疑問文の意味論及び照応・削除・前提投射などの現象を扱う談話意味論に関する詳細な解説がある。さらに、英語以外の言語からの貢献として、作用域マーキング、数量詞表現、名詞写像パラメータ意味論のパラメータについて議論している。

「第Ⅴ部：生物言語学」（尾島司郎氏著）では、ブローカ野・ウェルニッケ野の発見に繋がった古典的失語症の研究、母語獲得における臨界期及び言語進化に関して説明している。言語進化に関しては、チョムスキーの説とそれに相対するピンカーとブルームの説の相違点を説明している。言語脳科学に関しては、脳電位（EEG）及び事象関連脳電位（ERP）の非侵襲的脳機能計測の始まりから脳機能マッピング研究を解説している。さらに、特定言語障害やウィリアムズ症候群などの言語障害、鳥の歌などの動物研究についての説明がある。最後に言語脳科学の最近の発展として、脳磁図（MEG）や経頭蓋磁気刺激法（TMS）などの脳機能計測研究の多様化、人間言語の特性である構造依存性や階層性及びそれらに対応するブローカ野や背側経路などの脳内基盤研究に関して解説されている。

3. 特定のトピックに関する考察

1節で述べたように、本書の目的は今後理論言語学がどのような方向で進むのかを考えるきっかけを作るためである。実際に本書の中では今後の研究課題になりうる様々な点が指摘されているが、本節では紙面の関係上、パラメータ理論の展開と言語進化について及び「言語」とは何かについての2点に絞って考察する。

3.1 パラメータ理論の展開と言語進化について

本書第Ⅱ部第2章では、1980年代に展開された原理・パラメータのアプローチが提唱されてから始まったパラメータ理論の展開が紹介されている。原理・パラメータのアプローチでは、普遍文法は一般原理とパラメータから構成されていて、一般原理が言語の普遍性を捉え、一般原理に付随するパラメータが個別言語の多様性を説明すると考えられていた。パラメータの概念は、「記述的妥当性と説明的妥当性の間の衝突を解消する上で大きな成果をあげるものであった」（p. 60）が、その一方で「新たな個別言語間の違いが報告されると、それに特定的なパラメータが次々と提案されるという望ましくない事態が生じ」（p. 63）、その問題を解決するため可能なパラメータを制限する方向での研究が進んだ。例えば、「機能範疇パラメータ化の仮説」（Borer 1984, Fukui 1986）では、パラメータはレキシコン、特に機能範疇に限定されるべきという提案がなされた。

しかし、極小主義では、上記のようなパラメータ研究の流れに変化が生じた。本書第Ⅱ部第9章で紹介されているように、極小主義では、「併合（Merge）が生成した統語構造は、インターフェイスを介して概念意図（CI）システムと感覚運動（SM）システムに送られ、そこで適切な解釈を受ける」（p. 107）というモデルを仮定している。そして、「人間言語はCIシステムに対してのみ最適化されて」（p. 108）いて、Hauser, Chomsky & Fitch（2002）（HCF）での「狭義の言語機能」、すなわち（レキシコンから論理形式までの）統語演算システムは、CIシステムを満たすようにデザインされている（回帰的）併合のみから成り立っていると考えられている。従って、パラメータは統語演算システムに入り込む余地がなく、SMシステム至る外在化過程に限られるべきだと考えられ、「パラメータ的変異は外在化にかかわる形態音韻論に限定される」（p. 63）という「外在化過程パラメータ」が提案されている。そうすると、様々な言語間差異の現象は「外在化過程パラメータ」から導き出す必要があるが、これまで提案された具体的な「外在化過程パラメータ」は殆どなく、実際に本書においても「外在化パラメータ」についての具体的な議論はない。言語間差異を説明するためにどのような「外在化過程パラメータ」を考えたらよいのかはこれからの重要な研究課題に一つであると考えられる。

本書第Ⅱ部第2章・第9章及び第Ⅴ部第8章で解説されているように、狭義の言語機能は（回帰的）併合のみからなりパラメータは外在化過程に限られるという考え

は、言語進化の問題と深く関係する。進化は「生物進化」と「文化進化」に分けられる。「生物進化とは、ある生物のもつ遺伝子が大きく変化し、交配が遺伝的に不可能なほどそれまでとは違った生物になる大進化のこと」(p. 237) である。それに対して、「種の遺伝子的変化をともなわない」(p. 237) 文化の継承とその過程での変異が文化進化である。言語進化に関して言えば、狭義の言語機能が遺伝的に人類に備わったこと、すなわち狭義の言語機能の系統発生が言語の生物進化である。「HCF は、言語以外の認知領域における特定の計算課題 (例 : 空間ナビゲーション、数の同定、社会関係の理解) を解くために用いられていた領域特異的な回帰が、より一般化されて言語にも適用されるようになったと推測」(p. 258) していて、それは 7 − 10 万年前に「脳の再構成・再配線の副産物として生じた可能性があげられている」(p. 258)。狭義の言語機能の系統発生が生物進化であるとすると、「すでに存在している言語がさらに変化し多様化する「文化進化」の段階が存在する。そしてこの文化進化がコミュニケーションに関する適応進化のプロセス」(p. 112) であり、言語の多様性は (必要な相手にだけ伝え、伝えたくない相手には伝わらないようにするという) 反コミュニケーション効果がもらたすものだと、本書では主張されている。すなわち、「パラメータが捉えていたのは、人間言語の生物学的特性というより、個別言語の歴史的変化の中で文化的・社会的に育まれてきた多様性であり、いわゆる「文化進化 (cultural evolution)」の結果と考えるべきである。」(p. 65) と主張する。本書でのパラメータと言語進化に関する上記の主張は、どのような方向性でこれから研究を推し進めるべきかに関する重要な指摘であると思われる。さらに、本書第Ⅳ部第 9 章で紹介されている (名詞写像パラメータなどの) 意味論でのパラメータがもし存在するとすれば、言語進化の中でどのような位置付けになるのかも検討する必要があると考えられる。

3. 2 「言語」とは何かについて

言語の研究を行う際、そもそも言語学とは何を目的とする学問であるかを常に意識することは、どのような方向性で言語分析を行い言語理論を構築すべきかを決める上でとても重要である。この点に関しての理解を深めるために、本書第Ⅲ部第 5 章での解釈意味論と生成意味論との言語学戦争についての解説は有益であると思われる。解釈意味論は統語構造を生成しそれを (音韻表示と) 意味表示に写像するという言語モデルであり、その後の発展を経て本書第Ⅱ部で紹介されている極小主義に結び付いていく。それに対して、1960 年代後半から 1970 年代初頭にかけて隆盛を極めた生成意味論は、(抽象度の高い) 意味構造を生成しそれを統語構造に写像するという言語モデルを提唱し、解釈意味論と生成意味論の間で言語学戦争が勃発した。ここで注意すべき点は、解釈意味論と生成意味論との対立点は、同じ問題の解決法をめぐったものではなく、研究の目的が異なっていたことにあると、本書では指摘されている。すなわち、両陣営とも「言語能力の解明」を目標にしていた点では同じであったが、「言語」の指すものが異なっていた。解釈意味論での「言語」とは、「人間がある個別言語を話せるというときに脳内に内蔵している認知システム、さらには、限られた資料 (経験) を基にしてそのような認知システムに到ることを可能にする生物学的賦与物 (生得的機能)」(福井・辻子 (2013:403)) である。従って、人間言語にとって可能な文法の諸特性を解明するという目的の下、近代科学の方法論でアプローチできる問題に対象を限定した。この考え方は、現在の極小主義に至るまで一貫して踏襲されている。それに対して生成意味論では、「「言語は意味と音声とを繋ぐシステムである」というアリストテレス以来の広く受け容れられた認識」(福井・辻子 (2013:394)) に基づいていた。従って、統語論・意味論・語用論の間に明確な境界線を引くのではなく、広範な言語データをまるごと説明しなければならないという立場をとり、「意味 (論) を取り込んだ包括的な言語理論の構築」(p. 140) を目指した。生成意味論は、「意味や文脈を取り込んで大風呂敷を広げた」(p. 140) ことが一因となり衰退していくが、その考え方は認知言語学へと受け継がれていく。一言に「言語」といっても、そこには様々な側面が存在するわけであり、「言語」のどの側面を明らかにするのかという目的に応じてアプローチが異なるのは当然と言える。本書第Ⅲ部では、生成意味論のアップデート版であった認知意味論について、「認知意味論は、生成文法を補完するものでこそあれ、これと対立するものではありえない」(p. 150) とあるが、それと同様に生成文法と認知言語学も相互補完的である可能性もある。重要なのは、生成文法及び認知言語学の研究者が、それぞれの究極的目的を見失うことなく研究することであるように思える。

4. まとめ

言語についての新しい知見を得ようと研究する際、どのような概念的理由で言語理論が変遷し、その際にはどのような経験的証拠に基づいた議論があったのかを理解していないと、現在の理論的枠組みだけを見ていても、そもそも何が研究課題となり得るのかが把握できない。本書は、上記に挙げたこと以外にも潜在的に重要な研究課題となり得る点が多々指摘されていて、言語研究者にとってとても有益な書籍であると思われる。

参考文献

Borer, Hagit (1984) *Parametric Syntax*, Foris, Dordrecht.

Fukui, Naoki (1986) *A Theory of Category Projection and Its Application*, Doctoral Dissertation, MIT.

福井直樹・辻子美保子 (2013) 「「生成文法の企て」の現在——『統辞構造論』とその周辺」ノーム・チョムスキー『統辞構造論』(福井直樹・辻子美保子 (訳)) 訳者解説, pp. 325-409, 岩波文庫, 東京.

Hauser D. Marc, Noam Chomsky, and Tecumseh Fitch (2002) The Faculty of Language:

What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve? Science 298: 1569-1579.

明治大学 ——石 井 透

Kate Burridge and Alexander Bergs, *Understanding Language Change*

London and New York: Routledge, 2017. xvi + 297 pp.

本書は、言語変化の様々な側面について豊富な用例を用いながら説明した入門書である。用例は英語が中心であるが、ごく最近（21 世紀）の英語変化から採られたものが特に目立つ。著者の 1 人である Kate Burridge がオーストラリアで教鞭を執っているためか、他の英語史の本ではほとんど扱われることのない down under での用例も比較的多く見られる。ほか、フランス語、日本語、アボリジニの言語など他の言語も用例に多く取り入れられている。説明されている用例・事項が英語に特化したものではないので、英語史の入門書というよりは、英語圏の読者を対象にした言語変化の入門書と考えた方がよさそうである。各章には合間に 5 つ前後の Breakout boxes、章末に Further reading および Exercises を設けることで読者の興味を惹き、知識と理解を深める工夫をしているようである。全体的に平易でカジュアルな英語で書かれているが、著者もそのことを意識しており、formality の変化について述べる際に引き合いに出している: "Even the language we use in this textbook is itself a good example of this informalization of expression. The writing is more laid back and very much more personal than anything you will find in earlier textbooks […]" (p. 271)。

本書の構成は以下の通りである: 1. "Setting the scene" (pp. 1-27)、2. "Changes to the lexicon" (pp. 28-51)、3. "Changes to the semantics" (pp. 52-74)、4. "Changes in sound structure" (pp. 75-105)、5. "Changes in word structure" (pp. 106-133)、6. "Changes in sentence structure" (pp. 134-161)、7. "The spread of change" (pp. 162-188)、8. "Languages in contact" (pp. 189-214)、9. "Relatedness between languages" (pp. 215-246)、10. "An end on't" (pp. 247-276)。各章が 22~31 頁から成り、バランスよく配分されていることが分かる。内容面では具体的な事例を説明することが多い章と理論を中心に紹介する章があり、章により難易度が異なるように感じられた。以下、各章の内容を概観する。

第 1 章では実際の変化の用例を提示して読者の興味を惹いた後、1.1、1.2 でこの本で扱う変化のトピック（発音、意味など）についてごく簡単に説明している。1.3 では現在進行中の言語変化、1.4 では変化に対する人々の態度を紹介している。用例は英語とそれ以外の言語が半々であり、この章から、英語に特化しないというこの本全体の傾向が垣間見える。

第 2 章では新語と廃語の 2 つを扱っている。2.1 では派生や頭字語といった新語の形成方法 11 種を最新の例（政治的失態を –gate で表すなど）を含め紹介している。2.2 では廃語となる理由を obsolescence、"verbicide"（例えば mangy rascal, scoundrel などのように罵倒語などが繰り返し使われることで「擦り切れて」効力を失うこと）、reduction、intolerable homonymy、上記の理由がないのに廃語となった語の 5 つに分けて説明している。また語源についても 2.3 で触れている。

第 3 章では意味変化のパターンおよび原因について論じている。3.1 では broadening、narrowing、shift、changing values（amelioration and deterioration）の 4 つを一般的な意味変化の事例として挙げており、意味変化が連鎖する現象（chain reaction changes）も紹介している。3.2 では、意味変化の原因として社会・文化的要因、心理的要因、言語的要因の 3 つを論じている。3.3 "Regularity in semantic change" で Traugott（1982, 1985, 2003）などの意味変化の理論を紹介して章を閉じている。

第 4 章では音変化を扱っている。4.1 で消失、挿入、変化（同化、異化など）といった音変化の種類が導入されている。4.2 では phonetic と phonemic の違いを論じている。4.3 では類推など例外的な音変化を紹介している。4.4 では音変化の原因について言及している。

第 5 章は形態論的変化に関する章である。5.1 では再分析（異分析）について論じている。5.2 では類推が扱われているが、12 頁中 7 頁が Kuryłowicz の類推法則の説明に充てられており、やや専門的である。5.3 "Typology—change in morphological type" では言語類型論および Dixon（1997）などに見られる言語変化の類型論的循環説（屈折語→孤立語→膠着語→屈折語…と変化していく）を論じており、この節も専門性が高い。5.4 では形態論的変化を促す要因について紹介している。

第 6 章では統語論の問題を扱っているが、5 章に引き続き比較的難易度の高い章である。6.1 では語順の変化について、古英語や他のゲルマン語派の言語を例にとって説明している。6.2 "Typology and word order change" では Greenberg（1963）の類型論、とくに SVO の配列について論じている。6.3 "Creating grammar" では文法の変化について、英語の否定の発達過程を事例研究として説明している。本著は言語学の知識が無い学習者向けではあるが、この節では発音や意味の変化も併せて論じており、前章までの内容を理解していることが前提となっているようである。

第 7 章は変化の拡散について説明している、社会言語学寄りの章である。7.1 "Diffusion within the linguistic system" で拡散について概観した後、7.2 では拡散に関わる社会的要因（性別、年齢、階級など）を詳しく見ている。social network（Milroy 1987）や communities of practice（jocks や nerds といった、類似した振舞いをする集団）も拡散に関わるとされている。

第 8 章は言語接触に関する章である。8.1 "Types of contact" では言語接触により起こりうる 3 種類の結果、すなわち maintenance（母語の保持）、shift（新しい言語を使